研究 No. 0611

京マチヤの原形・変容・伝播に関する研究

ー建物先行型論と棟持柱祖形論にもとづく建築コラージュ形態史論ー

主査　土本　俊和*1
委員　坂牛　卓*2，　早見　洋平*3，　梅干野　成央*4

本研究は，京マチヤが生成される過程として原形と変容をあつかい，京マチヤが他地域につたわる過程として伝播をあつかった。この三者をあつかう際，建物先行型論と棟持柱祖形論という研究蓄積をふまえた。その上で，原形と変容をあつかう際，建築コラージュという観点を導入し，伝播をあつかう際，建物条件付き都市という観点を導入した。建築遺構と考古学的発掘という従来の資料を基礎としつつ，以上のあたらしい観点にもとづいて，京マチヤを再検討し，以下の仮説をえた。京マチヤは市立ての最小単位であり，その地方への伝播は都市形成の最初期に特定の都市域に対する建物条件として京マチヤが採用されたことによる。

キーワード：1）マチヤ，2）町屋，3）町家，4）棟持柱，5）ウダツ，6）卯建，7）土塀，8）土台，9）建物先行型，10）コラージュ

Original Forms, Transfiguration and Propagation of Town Houses called Machiya in Kyoto

- Morphology on architectural collage via the theories of buildings prior to plot division and ridge-pole supporting as prototype -

Ch.　Toshikazu Tsuchimoto
Mem.　Taku Sakaushi,　Yohei Hayami　and　Shigeo Hoyano

This paper is a morphological study on the original forms and transfiguration of town houses called Machiya, and the process of how Machiya spread to other areas. Based on an accumulation of studying of the theory of buildings prior to plot division and the ridge-pole supporting post as prototype, it introduces architectural collage that relates morphogenesis and urban planning with housing style that relates the propagation of buildings. It concludes that Machiya represented the minimum unit of the late medieval Kyoto market and it was adopted as the housing style in certain areas in the early stages of building cities.

1．はじめに

1.1 研究の概略

本研究の目的は，京マチヤの原形と変容と伝播を理論的かつ実証的に捕捉することにある。京マチヤは，日本のミヤコである京都にて，古代から現代に至るまで，連綿と形成されてきた都市型住居である。この京マチヤを対象に，本研究は形態史的な分析をくわえる。ここにいう形態史とは，形態が徐々に生成されていく過程を通時的に捕捉する方法の一つである。

形態史的な方法をもちいる際，理論的な骨組みとして本研究が援用するのは，①建物先行型論ならびに②棟持柱祖形論の二者である。①建物先行型論とは建物先行型に関する論考をさし，建物先行型とは地割が土地にほどこされる前に建物が土地の上に立地するという都市形成の一つをさす。中世後期から近世前期に至る京都では，建物先行型による都市形成が広汎にみられた点を，すでに論証した[注1)]。他方，②棟持柱祖形論とは民家の支配的な源流が棟持柱構造をもつという論考をさし，棟持柱構造とは地面からたちあがる棟持柱がじかに棟木をささえる構造をさす。京マチヤが棟持柱祖形論に該当する典型的な民家であることも，すでに論証した[注2)]。

以上の研究蓄積をふまえて，本研究は，原形と変容と伝播といった三つの相をあつかう。これらをあつかう上で，本論は，材料や部材や構法や構造や装飾といった，建築を構成する諸々の要素に分解した上で，それらの部分的な解体と部分的な再構築の過程として一連の形態生成をとらえる。このとき本研究が立脚する観点は，多種多様な諸々の要素のコラージュ collage によって建築が

*1 信州大学　教授　　*2 信州大学　准教授　　*3 信州大学　講師　　*4 信州大学　助教

成立するとともに変容していく，というものである。すなわち，三次元的な物体が寄せ集められて立体的な建築が成立し，その後も部分的に三次元的な物体が更新されていく，という観点に本論は立脚する。この観点は，生命体において形態生成がもっぱら遺伝的に規定されるという観点，あるいは，言語学における形態論が三次元的なモノにかかわらないという観点と対照的である。建築における形態生成は，コラージュという概念を得てはじめて合理的に説明され得る。

以上のように，本研究は，一連の京都研究ならびに民家研究の総括を目指し，その対象として京都の民家である京マチヤを選択し，その原形と変容と伝播の概略を捕捉する。

この研究は1985年に着手した京都研究からはじまる。1987年には，①建物先行型論を着想し，これを都市史研究の根幹として発展させてきた。1999年には，②棟持柱祖形論を着想し，これを民家研究の根幹として発展させた。さらに，③建築遺産に関する調査研究，ならびに，④伝統的建造物保存技術に関する調査を実施してきた。

以上の研究蓄積をふまえ，このたび，原形と変容と伝播を合理的に捕捉し得る概念をつけくわえる。その概念がコラージュである。

1.2 研究の方法と具体的な内容

本研究は，理論的なアプローチと実証的なアプローチから成る。

まず，理論的なアプローチとして，コラージュという概念を整理する必要があろう。現時点であきらかなのは，第一に，コラージュが二〇世紀初頭に現れた美術の一技法およびその作品をさしていた，という点である。第二に，都市におけるコラージュがコラージュをもちいてえがかれた理想都市であるコラージュ・シティをさしており，伝統都市という古い要素とユートピア都市という新しい要素がいりまじる姿として提示された，という点である[注3)]。実際，理想都市ばかりでなく，現実の都市も旧と新がいりまじり，現実の建築も古い要素と新しい要素を併せ持つ。都市と同様に，古いものと新しいものとから成る建築の姿は，断片が付加されていく一連のいとなみの結果である。このいとなみを建築におけるコラージュと定義することができる。と同時に，断片が付加されてできた建築全体もコラージュと定義することができる。前者が一技法としてのコラージュ，後者が作品としてのコラージュといえる。

従来の研究は，一方で，純粋にまったく新しい建築に関心が集中し，歴史的な造形に無関心でいた。これはモダニストによる建築設計を規定した。他方で，増改築の過程を無視した原形復旧に関心が集中し，形態生成に無関心でいた。これは建築史家による復原を規定した。これら二つの難点を克服するために，コラージュの概念を建築につけくわえる。

コラージュの概念を加味した上で，つぎに，原形と変容と伝播を京マチヤに即してあつかう。この実証的なアプローチは，一見すると，膨大な対象をあつかうようにみえるだろう。しかし，本研究は，これまでの京マチヤ研究の蓄積を十分にいかすものであり，原形と変容と伝播をコラージュ概念に即してとらえなおすものである。すでに，京マチヤの原形は，「路にじかに面してたつ，路に対して口をひらいた割長屋，および建物を囲繞するモノである」とし，「近世マチヤが成立したのは，この両者が近世初頭におちあったことによる」という結論を提示した[注4)]。すなわち，本研究は，京マチヤの原形と変容に関しては，一定の研究の方向性をすでに提示した。さらに，京マチヤの伝播に関して，2005年より上越市高田城下町のマチヤに即して棟持柱構造と吹き抜けをもつ建築遺構を実測するなど，地方都市の町屋が，京マチヤの姿と色濃く類似しながらも，地域の特性に合致した断片が付加されている点を捕捉している[注5)]。

このように，本研究は，これまでの研究蓄積をふまえつつ，新たにコラージュ概念を導入し，京マチヤに即して，原形と変容と伝播を形態史的な観点からとらえなおすことを目的とする。

1.3 建築コラージュ形態史

本研究の特色は，建築コラージュ形態史というべき論点を，京マチヤに即して，提出することにある。

今日，建築の保存・再生・改修のたかまりは，現代日本の社会的要請である。これまで，スクラップ・アンド・ビルドをくりかえしてきた日本社会が建築物の保存・再生・改修を積極的にうけいれはじめた点は，時代の転換期を意味しよう。この転換期をむかえた今，保存・再生・改修への総合的な判断力がもとめられる。

保存と再生と改修のうち保存という手法は，建築遺産の概念をともなっており，とりわけ純真性 authenticity という価値概念をともなって，形成されてきた。この価値概念は，ヨーロッパの建築文化を基盤としていた。他方，日本において，保存の概念は，伊勢神宮にみられる式年遷宮のように，純真性に合致しない場合もある。伊勢の場合，当初の形態はつたえられるが，当初の部材はたもたれない。再生という手法も，建築の原初的な形態に改変をくわえる場合が多々あるので，純真性という価値概念に合致しない。改修という手法も，純真性という価値概念に誠実である，とはいえない。

保存とは対照的に，建築の歴史をふりかえった場合，純真性を保持していることが建築遺産の価値付けには有効ではあるとしても，圧倒的多数の建築的ないとなみは純真性をそこなう方向へむかう一連の変容にある。

本研究の特徴は，建築形態の変容を，純真性という価値概念に対比させることにより，これまでの保存の概念を拡大し，再生・改修の概念を充実させる点にある。

すなわち，断片が寄せ集められることによってできあがった建築，そして，断片がつけくわえられたり，とりはがされたり，とりかえられたりして，つねに変容していく建築は，純真性をかくという意味でさげすまされるべきものではなく，むしろ，コラージュといういとなみの結果，できた建築として積極的な価値付けがなされるべきである。この重要な方向性を本研究は提示する。

建築のコラージュは，建築の純真性と対照的である。建築のコラージュという側面を積極的に評価するために，京マチヤに即して，原形と変容と伝播をあつかっていく。その際，本論に特徴的なのは，①建物先行型論と，②棟持柱祖形論という，二つの有力な先行研究をふまえる点にある。両者は，ともに，建物の原形を探究していく上で有効な観点であった。さらに，両者は，建築の発展していく姿（変容と伝播）を探究していく上でも有効な観点となる。①建物先行型論は，建物と土地の関係に着目し，おもに地割という建築的な要素（そして都市的な要素）に着目してきた。②棟持柱祖形論は，棟持柱という建築的な要素に着目してきた。この二つのほか，様々な建築的な要素を代替可能な断片として捕捉した上で，建築形態に即して，分析することができる。建築のコラージュ概念に即した分析と総合が本研究の特徴である。

2. マチヤの定義

2.1 「町屋」ないし「町家」とマチヤ

ここでもちいるマチヤは，路に面して口をひらいてたつ建物である。これは文献史料に散見される文言としての「町屋」ないし「町家」とかならずしも対応しない。文献史料にみえる「町屋」ないし「町家」は歴史的な用語である。それが具体的に何をさしているのか。この点が検証されなければならない。

他方，路に面して口をひらいてたつ建物が，「町屋」あるいは「町家」とよばれていたか否かをとう前に，路に面して口をひらいてたつ建物をマチヤと定義することによって，その建築を具体的に考察することができる。

従来，歴史的な用語としての「町屋」ないし「町家」と路に面して口をひらいてたつ建物すなわちマチヤとを，これまでの研究は，ながい間，区別してこなかった。前者は，文献史料を渉猟する作業が前段となる。対して，後者は，まず建築類型を限定し得る定義をあらかじめ設定する作業が前段となる。すくなくとも，この前者と後者が区別されなければ，言葉が何をさしているのか，逆に何が言葉と対応しているのか，といった能記と所記の区別が成立しない[注6]。

能記と所記の区別が明確でなかったこれまでの研究分野のなかで，混乱がみられた分野に中世住居史があろう。近世住居史の場合，とくにマチヤをあつかってきた民家史あるいは都市史の分野では，わずからながらも建築遺構や考古学的発掘資料や古絵図や絵画資料や文献史料に即してモノを捕捉する作業を通じて復原的にマチヤを想定することができたからである。他方，中世住居史の場合，たとえば伊藤鄭爾による『中世住居史』[注7]が提示した論点を再検討していく作業のなかで，中世のマチヤを具体的なモノとして捕捉する作業に困難がともなう。絵画として初期洛中洛外図屏風が戦国期の資料としてあるものの，建築遺構や古絵図の遺存はほぼ皆無である。このため，復原的考察は考古学的発掘資料にたよらざるを得ない。しかしながら，かぎられた考古学的発掘資料と建築的考察の限界のために，考古学分野における復原案にしばしば飛躍がみられる[注8]。この状況を克服する第一歩として，能記と所記の区別がもとめられる。

2.2 京マチヤの定義

路に面して口をひらいてたつ建物というマチヤの定義に即して，さらに京マチヤを定義することができる。以下に列挙した八つの属性は，京マチヤが中世的マチヤから転換した後に成立した近世的マチヤにみられるものである。したがって，下記の八つの属性をすべてもつマチヤは，近世的京マチヤである，と定義することができる。同時に，建築遺構や考古学的発掘資料や古絵図や絵画資料に即しても，下記の八つの属性を近世初頭遺構の京都のマチヤのなかに確認することができる。

①路にじかに面してたつ
②路に対して口をひらく
③切妻
④平入り
⑤個々の房の間に隙がない
⑥棟持柱構造
⑦妻壁の柱脚部に土台をすえる
⑧独立屋

路に面して口をひらいてたつ建物というマチヤは，属性①と属性②を内包として定義づけられる。対して，近世的京マチヤの定義は属性①から属性⑧までを内包として定義づけられる[注9]。

マチヤ（属性①-②を内包）と近世的京マチヤ（属性①-⑧を内包）との間には，前者から後者への発展的な変容がみられ，後者が変容の最終段階に位置する。かたや，ある時代を限定して共時的にかんがえれば，後述するように，近世初頭に属性①から属性⑧までを内包にもつ近世的京マチヤの他の地域への伝播がみられた。

このように，変容と伝播をかんがえる上で，核となる地域が京都であり，核となる時代は近世初頭である。まず，地域に即してかんがえた場合，京都から「京都型町

家」が伝播したという大場修による論点に注目する必要がある[注10]。かたや，時代に即してかんがえた場合，中世的マチヤから近世的マチヤへの転換を指摘した伊藤鄭爾による論点に注目する必要がある[注11]。

3. 京マチヤの原形

3.1 京マチヤの二つの原形

近世的京マチヤが属性①から属性⑧までをもつにいたる変容のなかで，原形となる二つの形態を指摘することができる。ここにかかげる二つの原形はそれぞれがマチヤ割長屋説とマチヤ独立屋説に対応する。

まず一つは，路にじかに面してたつ，路に対して口をひらいた割長屋（原形X）である。いま一つは，建物を囲繞するモノ（原形Y）である。

前者は，野口徹が提示したマチヤ割長屋説に対応する[注12]。なお，路に面してたつ切妻で平入りの独立屋は割長屋ではない，とすることもできる。しかし，路に面してたつ切妻で平入りの独立屋は割長屋の一房である，ととらえることができる。このため，これをあえて独立屋としてとらえる必要がない。路にじかに面してたつ，路に対して口をひらいた割長屋（原形X）は，属性①-②を内包とするマチヤの定義に対して，割長屋という属性をつけくわえたものとして定義づけられている。割長屋という属性は，京マチヤの原形のなかにふくめることができる。しかし，これは，京マチヤ以外をふくめた場合のマチヤ全般をあつかう際，その原形のなかにふくめることができない。というのも，京マチヤはことごとく平入り（属性④）であるが，京マチヤ以外のマチヤは，路に面して口をひらいてたつものの（属性①-②），平入りであるとはかぎらず，割長屋でない場合もあるからである。

対して，後者は，建物を囲繞する牆壁であって，築地と土塀をあげることができる[注13]。囲繞する牆壁すなわち築地ないし土塀は，京マチヤの八つの属性のなかにない。これは，京マチヤの属性というより，京マチヤを，つねにではなく，しばしば，とりまく属性である。つまり，京マチヤは，しばしば，牆壁によって囲繞されている。京都における牆壁は，ふるくは築地がみられ，のちに土塀がみられる。築地にとってかわって，土塀が京都に散見されるようになるのは，初期洛中洛外図屏風を通じて判断すると，戦国期以降である。土塀は，「壁」，「高壁」，「面壁」，「塀」，「高塀」などとよばれ，事例こそすくないものの，路に面して口をひらく建物を囲繞している事例がある[注14]。このことは，初期洛中洛外図屏風を通じて看取される。また，囲繞する牆壁のなかの領域には，割長屋が立地することも想定され得るものの，実際は建物の独立性を牆壁が規定しているとみるのが現実的であるという意味で，建物を囲繞する牆壁は，マチヤ独立屋説に関連する。

割長屋と独立屋は，割長屋の一房を割長屋にふくめた場合，建築的にまったくことなる。では，なぜ，両者が近世的京マチヤの原形であるといえるのか。すなわち，路にじかに面してたつ，マチヤ割長屋説に対応する，路に対して口をひらいた割長屋（原形X）と，マチヤ独立屋説に対応する，建物を囲繞するモノ（原形Y）の両者が，なぜ，近世的京マチヤの原形であるといえるのか。

この理由は，土本「京マチヤの原形ならびに形態生成」（2007）でのべたように，「近世マチヤが京都で成立したのは，この両者が近世初頭に落ち合ったことによる」[注15]。「落ち合った」という建築的ないとなみがコラージュを意味する。

3.2 形態の均一化

京マチヤの原形は，原形Xと原形Yから成る。その両者が「近世初頭に落ち合ったこと」によって，近世的マチヤが京都で成立した。それ以前の京マチヤは，属性①から⑥までを有していたが，属性⑦（妻壁の柱脚部に土台をすえる）と属性⑧（独立屋）を有していなかった。

いうまでもなく，一般に概念の内包が拡大するとその外延が縮小する。属性①から属性⑧までを有するにいたった近世的京マチヤは，その内包のひろさ故に外延がせまい。つまり，京マチヤは，内包がひろがるにつれ，外延をせばめた。このことは，別なことばでいえば，京マチヤがよりおおくの属性をかかえこめば，かかえこむほど，形態的な多様性がとぼしくなっていったことを意味する。これは，建築形態の均一化を意味する。

このようなにかよった姿をもつ京マチヤは，近世京都という巨大都市のなかで無数に存在したという意味で，広域の都市域が建築的に均一化された，といえる。

このような均一化の過程は，遺伝的な作用によるのではなく，様々な建築構成要素がマチヤの属性としてつけくわえられていったという通時的な展開過程の結果にほかならず，つけくわえられていくというこの過程にみられたのがまさにコラージュであった点に留意しなければならない。つまり，この場合のコラージュは，多様な形態を生成させる方向にあったのではなく，コラージュがもつ一般的なイメージとは対照的に，均一の形態を実在化させる方向にあったのである。

4. 戦国期の京マチヤ

4.1 戦国期の京マチヤの位置

京マチヤの二つの原形をふまえた上で，マチヤの変容と伝播をかんがえる際，地域的にも時代的にも，戦国期の京マチヤに関して考察をふかめるのが的確である。というのも，「京都型町家」が京都から地方に伝播したという大場修の論点や，中世的マチヤから近世的マチヤへ

の転換を指摘した伊藤鄭爾の論点を視野におさめると，マチヤが中世から近世へ転換した前段に位置するのが，戦国期の京マチヤであるからである。

戦国期の京マチヤには，建築コラージュ形態史的な観点からして，二つのおおきな変容がみられた。第一が，掘立と土台を併せ持つマチヤである。第二が，妻壁ないし界壁に牆壁（土塀としての牆壁）をとりこんだマチヤである。

まず，第一のコラージュとしての側面は以下のとおりである。掘立は柱脚部が固定されているのに対して，土台はもともと基礎に固定されておらず，地面ないし玉石の上にのるだけであって，土台が基礎に堅結されるのは近代にはいってからのことである。土台の上にすえらえた柱脚部は，その下部にある，基礎に固定されていない土台とともに，基礎に固定されていない。すなわち，脚部が掘立である柱と脚部が土台である柱とを併せ持つマチヤが戦国期の京都で姿をあらわした。この姿は，掘立と土台とのコラージュの結果，得られたものである。

つぎに，第二のコラージュとしての側面は以下のとおりである。都市域をくぎる牆壁の支配的な姿が築地から土塀にかわったのは，戦国期の京都であると初期洛中洛外図屏風から看取され得る。土塀は，築地にとってかわる囲繞装置であって，本来は都市域を物的に区分するためにもちいられた。もともとは都市的な囲繞装置であった土塀が，京マチヤをくぎるようになる。すなわち，妻壁ないし界壁に土塀をとりこんだマチヤが戦国期の京都で姿をあらわした。この姿は，土塀という牆壁と妻壁ないし界壁とのコラージュの結果，得られたものである。

4.2 掘立と土台を併せ持つ戦国期の京マチヤ

初期洛中洛外図屏風は，戦国期の絵画資料である。そこには，掘立と土台を併せ持つ建物が，路に面して口をひらいた建物すなわちマチヤとして，えがかれている。すなわち，掘立と土台を併せ持つマチヤが初期洛中洛外図屏風に散見される。掘立は建物の下部が地面のなかにうめこまれているのに対して，土台は建物の下部が地面の上にすえられているにすぎない。掘立と土台はたがいに対照的である。この両者を一つの建物のなかに併せ持つ小規模建造物として，京マチヤをとりあげ，その建築史的な意義をあきらかにする。

まず，土台をもつ建物と考古学的発掘調査との関連にふれる。

京マチヤは，建築遺構をみると，土台をもつばかりでなく，初期洛中洛外図屏風の描写から判断して，一六世紀にはすでに土台をもっていた可能性がたかい[注16)]。初期洛中洛外図屏風（東博模本など）によると，小川という川の，その上にたつ家が土台をもっていた。この二本の土台は，川の上にかけられた二本の橋桁の役割をはたしている。橋桁の役割をはたす二本の土台は，切妻で平入りのマチヤの妻壁の最下部に位置している。土台がすえられているのは，妻壁の最下部だけである。マチヤの平は，口をひらいている。そのロはΠの形をなす。二本の垂直材の上に一本の水平材がマグサとしてのる。二本の垂直材の脚部に土台はみえず，その脚部は掘立である，と判断してよい。

このように，初期洛中洛外図屏風にて，小川という川の上にたつマチヤは，妻壁の最下部のみに土台をすえており，その土台は妻壁の最下部を規定するとともに，川の上にかかる橋桁という役割もはたしていた。

このような姿は，川の上にたつマチヤにかぎられたものではなかったことが，初期洛中洛外図屏風（東博模本）から，あきらかである。東博模本は，川の上ではないところに二本の土台を妻壁の最下部のみにもつマチヤをえがく。したがって，初期洛中洛外図屏風に散見されるこの姿からして，一六世紀に京マチヤは，川の上という立地条件にかぎられることなく，二本の土台をすでにもっていた。したがって，おそくとも一六世紀以降のマチヤにはその概念の内包に土台（属性⑦）をふくめることができる。

4.3 妻壁ないし界壁に土塀をとりこんだ戦国期の京マチヤ

京都にみられた牆壁は，もともとは築地であった。築地は，寝殿造などの上層住宅を囲繞する装置であった。この築地は，版築という土をつきかためる工法によるので，牆壁を自立させるために芯柱や控柱をともなうことがないが，牆壁の頂部に覆いをのせる。対して，土塀は，築地にとってかわる囲繞装置として，応仁の大乱以降の戦国期にみえるようになる。この土塀は，築地と対照的に牆壁を自立させるために芯柱や控柱をつかうが，築地と同様に牆壁の頂部に覆いをのせる。

築地と土塀はともに都市域を囲繞する装置でその頂部に覆いをもつが，上層住宅を囲繞した前者が版築によるもので掘立によらないが，庶民住宅を囲繞した後者は版築によらないが掘立による。さらにいえば，築地は壁があつくその面に勾配があるに対して，土塀は壁がうすくその面に勾配がなく垂直をなしている。

奈良の法隆寺境内では，いまも築地の室町時代の遺構がある。京都では，築地は応仁の大乱のあとに姿をけしはじめ，土塀にとってかわられた。築地と土塀はともに頂部に覆いをもつ牆壁であるものの，両者はことなる形態をもっていた。

このように築地と土塀は異質な属性をふくみもつ。これら二つのうち，マチヤのなかにとりこまれたのが土塀であった。たしかに，マチヤは，中世前期において，築地にもたれかかりながら，あるいは，それをつきくずしながら，「都市にできた様々な隙間を利用して」，立地

した，といえる[注17]。このように，築地はマチヤの立地とかかわる。その後，マチヤという建物の本体のなかにとりこまれたのは，築地ではなく，土塀であった。その時代は，応仁の大乱以降であった。その根拠は，初期洛中洛外図屏風と一七世紀前半の洛中洛外図屏風（林原美術館本，舟木本など）である。

では，「壁」，「高壁」，「面壁」，「塀」，「高塀」とよばれていた土塀が都市域をくぎるばかりでなく，マチヤという建物をもくぎるにいたった変容とは，具体的にどのようであったか。

端的にいえば，「壁」，「高壁」，「面壁」，「塀」，「高塀」とよばれていた土塀は，戦国期に京マチヤにとりこまれることによって，卯建になった[注18]。このとき，卯建ないしウダツにある二つの意味を把握する必要がある。今日，京マチヤにかぎらず，マチヤの妻壁にみえる壁は，ぶあつくて，その頂部がマチヤの屋根よりもたかい。屋根よりたかい，ぶあついこの妻壁が卯建ないしウダツの意味する一つである。いま一つは，ウダツが棟持柱を意味していた，ということである。京マチヤは棟持柱構造（属性⑥）であり，この構造は妻壁にあらわれる。原初的に，この構造は掘立柱構造にささえられていたが，のちには妻壁の最下層に土台をすえることによって，この部分が掘立柱構造ではなくなったものの，先述のごとく，マチヤの平にすえられたΠ字型の口が掘立柱構造として自立するために，マチヤ全体として，構造的に安定をたもっていた。

棟持柱構造をなす妻壁（割長屋の場合は界壁をふくむ）は，柱の脚部が掘立であっても土台であっても，柱の列から成る姿であってもよく，壁体としてぬりこめられている必要がない。

そもそも，住居がむれひろがる場のなかに塀が登場したのは，「垣は外から覗かれるのが普通で，是が出来ないといふ新たな特徴が，別に新たに塀といふ漢語を採用しなければならなかつた理由であらう」[注19]と『居住習俗語彙』が「ヘイオイ」の項でしるすように，のぞかれないという要請からであったろう。「ヘイオイ」は，もともとは『邦訳日葡辞書』にみえる「塀の覆い」であったろう。塀は，都市空間のなかでのぞかれないという要請のために壁という言葉と別にあらわれ，京マチヤにおいては，妻壁のなかにとりこまれた。

実は，土塀の芯柱が掘立であるとともに塀の頂部にまで芯柱が達していた姿が，妻壁の柱が下部から棟木（ないし母屋桁）まで達していた京マチヤの姿にまさに合致していたのである。

「壁」，「高壁」，「面壁」，「塀」，「高塀」とよばれていた土塀は，京マチヤの妻壁と合体した。さらに，割長屋の姿をのこしていた京マチヤの界壁とも合体した。合体した壁（妻壁ないし界壁）は棟持柱構造であった。棟持柱はウダツ（オダツ，オダチなどの転訛あり）とよばれていた。よって，土塀と一体となった妻壁は，卯建ないしウダツとよばれつつ，棟持柱を意味するウダツをその音にのこしつつ，屋根よりたかい，ぶあつい妻壁を意味するにいたった。

この変容は，まさに，都市域の囲繞装置の一つである土塀と京マチヤの妻壁（割長屋の姿をのこしている場合は界壁をふくむ）とのコラージュによる。

土塀が妻壁ないし界壁にとりこまれるという，以上の変容をふまえると，路にじかに面してたつ，路に対して口をひらいた割長屋というマチヤの原形（原形X）と近世的京マチヤの属性である独立屋（属性⑧）との関連を合理的に説明することができる。

つまり，京マチヤの原形は割長屋であり，割長屋を構成する個々の房が個別に更新する過程をへて，独立屋が出現する。割長屋からの個別的な更新過程の結果，姿をえた独立屋はすでにある割長屋の残存との関係にて，間口規模が規定されることになる。ここに伊藤鄭爾が『中世住居史［第二版］』にてのべた問題が生じることになる。しかし，伊藤が想定していたような地割が建物を規定するという過程[注20]は京マチヤが中世後期から近世初頭にかけて変容するときにみられなかった，と推断することできる。建物が規定されたとしたら，それは隣の建物との関係から規定されたのである。しかし，隣の家は独立屋から出発したのではなく，割長屋を構成する個々の房として出発した。この姿は建物先行型である。

4.4 戦国期京都における割長屋とウラ

では，京マチヤの全貌を単体の建物あるいは建物の集合だけでなく，建物の周辺の土地をふくめた領域に即して，戦国期の京マチヤを捕捉する。

建築遺構や考古学的発掘資料や古絵図や絵画資料や文献史料を参照すべきであるが，建築遺構が遺存していないので，考古学的発掘資料や絵画資料や古絵図や文献史料が資料となる。

まず，考古学的発掘資料として，山本雅和からの指摘がある。山本は，「調査例では町屋と考えられる建物は，すべて独立した建物で長屋は見つかっていません」と指摘し，「長屋があったとすると，今までに見つかっていないか，あるいは従来の調査方法では見つけられない形態であったと考えられます」と指摘している[注21]。

戦国期の京マチヤが妻壁の最下部に土台がすえられていた場合，土台の下に石がしかれていなければ，考古学的発掘は土台があった位置に何も看取することができないであろう。看取されるとすれば，京マチヤの平のオモテとウラにあるΠ字型の口を形づくる部材のうち，二本の垂直材の脚部にあたる柱穴のみであろう。したがって，戦国期の京マチヤが妻壁の最下部に土台をもつ場合，そ

の京マチヤは割長屋であった可能性がある。つまり，山本が指摘するように，「従来の調査方法では見つけられない形態であった」ために，考古学的発掘で長屋がみつかっていない，とかんがえることができる。

一般に，ウラが細分化されていることは，かならずしも路に面してたつマチヤが独立屋であることを意味しない。逆に，路に面してたつマチヤが独立屋であることは，かならずしもウラが細分化されていることを意味しない。つまり，以下の四つの場合を想定することができる。

- 路に面してマチヤが独立屋としてたち，個々の間口規模に応じてウラが細分化されている。
- 路に面してマチヤが割長屋としてたち，個々の房の間口規模に応じてウラが細分化されている。
- 路に面してマチヤが独立屋としてたつが，ウラが細分化されておらず，一体的な利用をとどめる。
- 路に面してマチヤが割長屋としてたち，ウラが細分化されておらず，一体的な利用をとどめる。

現実には，路に面してたつマチヤは独立屋と割長屋が混在する姿も想定される。同様にウラは，独立屋の個々の間口規模，あるいは割長屋の個々の房の間口規模に応じて，細分化されている箇所もあれば，細分化されずに一体的な利用をとどめている箇所もある，と想定される。

以上にくわえ，独立屋と割長屋がまじる場でウラが細分化されていたり細分化されていなかったりしていた場合を想定すると，現実の姿はさらに多様であったろう。

5. 建築的な合理性からの検討ならびに仮説の提示

5.1 建築的な合理性

考古学的発掘資料と絵画資料を概観した後では，古絵図や文献史料を概観すべきである。しかし，古絵図や文献史料は，さほど明確にモノないし形をつたえないので，ここでは，建築的な合理性という観点から，戦国期の京マチヤの全貌を捕捉する。

5.2 掘立柱構造と土台構造を併せ持つこと

京マチヤはもともと掘立柱構造であったが，戦国期には妻壁の最下部に土台構造がみられるようになった。しかし，京マチヤの妻二辺と平二辺から成る計四辺について，すべて壁の最下部土台をすえた場合，上部の部材の接合に剛性がたもたれていないと，安定をたもちにくい。

しかしながら，平二辺にはΠ字型をなす口がオモテとウラにそれぞれあって，Π字型を構成する三本の部材のうち，二本の垂直材はその脚部が掘立であった。このことにより，掘立柱構造をもつ平二面は自立し，それにともなって，妻二面と平二面の計四面から壁が構成される京マチヤは安定性をえている。

したがって，掘立柱構造と土台構造を併せ持つ戦国期の京マチヤは，安定であり，建築的にみて合理的である。

5.3 妻面が軸部と小屋組に分離していない土台構造

京マチヤは，近世的京マチヤに変容する前から棟持柱構造（属性⑥）であり，妻壁の柱脚部に土台をすえている（属性⑦）。つまり，戦国期の京マチヤは，妻面が軸部と小屋組に分離していない土台構造である。当該期の土台は，基礎ないし地面に緊結されていないので，土台から上の構造物は，地面からはなれて，あるいは地面の上をすべって，移動することができる。まず，軸部と小屋組に分離していない妻壁は，それが一体的なパネルとしてあつかわれる上での大前提である。他方，土台は，狭小な間口規模の土地のなかで，マチヤが個別に更新する際，隣家の境目のぎりぎりまで間口規模をひろげるために地面の上をすべる土台はすこぶる有効である。同時に，この際，すべる土台の上にある妻壁は一体的なパネルでなければならない。そもそも，伊藤鄭爾が指摘したように，土台は不整形な土地に建物をたてる上で有効であり，角水解消技術としての土台の役割はおおきい[注22)]。

以上にみたように，妻面が軸部と小屋組に分離していない土台構造は建築的にみて合理的である。

5.4 桁のない姿

戦国期の京マチヤに桁のない姿が初期洛中洛外図屏風に描かれていることを指摘した伊藤鄭爾は，この姿を疑問視した。すなわち，「室町時代の町屋」に言及して，「この構造には不審な点も多く，第一桁がない」[注23)]としるした。

しかし，この姿は不合理な建築形態というではけっしてない。というのも，戦国期のマチヤの場合，棟木や母屋桁といった屋根面にある水平材は，登り梁の上にのっており，これら以外の水平材はなくてもよいからである。妻壁では，土台の上に三本の通し柱（中柱が棟持柱）がのり，その上に二本の登り梁がのって，それが妻壁の一面をなす。そして，左右一対の妻壁のそれぞれの頂部に位置する登り梁の上に，棟木と母屋桁がのる。これにくわえて，平の面が掘立柱構造として自立すれば，京マチヤは全体として安定である。平の面にはオモテとウラにΠ字型の口があり，二本の垂直材は，掘立であるばかりでなく屋根面まで達しておらず，頂部で水平材をうけている。二本の垂直材と一本の水平材は，鳥居の形をなして，口を形づくっている。

すなわち，初期洛中洛外図屏風の描写のとおり，梁がなくても，京マチヤは安定しており，かつ建築的にみて合理的である。

5.5 中土間形式とアイヤ

オモテの口とウラの口の間が土間になっていて，土間の両脇が床上になっている場合，これを中土間とよぶ。

戦国期の京マチヤが中土間である点を伊藤鄭爾が指摘してきた[注24]。近年，中土間をもっていたマチヤの発掘遺構と解釈され得る遺構面が検出され，桜井みどり・南孝雄「伏見城跡」にて報告された[注25]。そもそも，マチヤが中土間形式である点は不自然ではない。近世にはいると，この中土間形式がみられなくなり，片側土間形式に変容する。片側土間形式は，近世的京マチヤと定義づけられるマチヤが併せ持つ属性である。問題は，戦国期のマチヤがなぜ中土間形式を採用していたのか，という点にある。

中世後期奈良をあつかった伊藤は，「屋敷を分割譲渡している例」に注目し，「半分に切断して二住居を形成できる住居が存在する。それが中土間住居である。」と指摘した[注26]。また，「有力家主層が分家・別家による同族団を形成したのにたいして，中小家主層は諸子分割相続をしながらも別の屋敷に別棟の住居を構えることは少なかったようである。彼らの間では住居とそれに伴う屋敷を空間的に二分して相続することが行われた。当時の奈良ではかかる住居を相家または合家と書いている。」[注27]と指摘し，「この相家（合家）なる言葉は，現在の奈良市民のなかに全く伝承されていないし，また半分売却して一住居を構成できる住居は二軒長屋を除けば存在しない。」[注28]と指摘した。しかし，アイヤとの呼称は現代でも富山県や新潟県にみられ[注29]，ここでみられる姿は，一つの建物を分割して，二つの住居として利用するものである。これとは対照的に，小五月銭納帳にみられる姿は，一つのアイヤに複数の者がいる姿であって，一名の家主をもつ一つの家族から成る姿ではない。端的にいえば，すくなくとも土間の両脇にある左右の床上を利用するものは，同族を形成している必要はない。そこは両脇に他人がいてもよい。

一つの家に一人の家持をさだめて，その人を町人足役（のちに代銀納による軒役へ移行）の負担者に位置づけたのは，天正19年（1591）の洛中地子免除以降である。それをさかのぼる時代において，一つの家に一人の家持をさだめていない姿があっても不思議ではない。

したがって，中土間とアイヤがあっても不自然ではない。

5.6 オモテ構えとウラ構えの類似

マチヤはその属性に面路性すなわち路にじかに面してたつ点（属性①）が強調される。路に面したオモテばかりでなくウラもみると，戦国期の京マチヤはオモテの構えとウラの構えがほとんどおなじ形である描写が初期洛中洛外図屏風に多々ある。実は，路に面したオモテ構えは，ウラに面したウラ構えと，形態的にすこぶる類似している。よって，オモテ構えにみられる一連の形態的な特徴はオモテ構えにかぎられたものではなく，ウラ構えにあてはまる。したがって，オモテ構えとウラ構えの差異は，形態的な差異ではなく，位置的な差異にある。つまり，オモテ構えはオモテにあるからオモテ構えであり，ウラ構えはウラにあるからウラ構えである。しかし，中世的マチヤの原初的な形態は，ウラとオモテの構えを形態として区別していない。

特に，Π字型の口はオモテにもウラにもあって，これが中土間のオモテとウラに位置している。平面は，二つのΠ字型の口ではさまれた土間（つまり中土間）とその両脇の床上から成る。路に対してミセを開く姿あるいはタナを路に面して出す描写もある。しかし，タナを路に面して出しておらず，路に対してミセを開かない姿もある。この姿をもつマチヤはシモタヤであると解釈されてきた[注30]。路に対してミセを開く姿あるいはタナを路に面して出す姿のマチヤは商いをいとなんでいる，と理解してよいだろう。

しかし，従来，解釈されてきた，タナを路に面して出しておらず，路に対してミセを開かない姿は，シモタヤを意味していたのであろうか。シモタヤとは，店がならぶマチのなかにあって商業をいとなまない住み家をさす。このような姿のマチヤでも，オモテの口には暖簾がかけられており，その暖簾に文字紋がみえ，それらは何かを意味しているはずである[注31]。このような暖簾と文字紋は，路に対してミセを開く姿あるいはタナを路に面してだす姿のマチヤにもみえる。

つまり，路に対してミセをひらいているマチヤとそうではないマチヤは，ともに，路に面したΠ字型の口に文字紋をもつ暖簾をかけている。もし，暖簾ならびに文字紋が商人ないし職人をしめしているとすれば，路に対してミセをひらいていないマチヤがシモタヤであるという指摘はただちに謬説となる。

マチヤのオモテとウラにかまえられたΠ字型の入り口は鳥居の形をなしている。連釈之大事「修験山伏の市立図」[注32]は，市立ての場として，二つの鳥居にはさまれた場をえがいている。この姿から推すと，鳥居の形をなすオモテの口とウラの口にはさまれた場は，市立ての場を意味していた。

この解釈がただしければ，二つの鳥居形の口にはさまれた中土間が市立ての場であった。戦国期の京マチヤはいまだ割長屋の姿をのこしており，その個々の房は中土間をもっていた。二つの鳥居形にはさまれた中土間そのものが市立ての場であった可能性がある。この場合，マチヤの個々の房が最小単位の市立ての場すなわちマーケットであった。

マチヤの個々の房が最小単位のマーケットであったとするならば，マチヤの個々の房が立地した場所そのものがマーケットとしてみとめられても何の不思議もない。というのも，戦国期の京都がいたるところにマチヤを立

地させており，その多くに商いをいとなんでいる姿を，初期洛中洛外図屏風から，みてとることができるからである。

当該期の京都は，すでに限定された領域のなかだけに市立てすなわちマーケットの立地を限定しておらず，都市全域にマーケットを散在させていた。このことを合理的に説明できるのは，戦国期の京マチヤの二つの鳥居とそれにはさまれた中土間がマーケットとして最小の単位をたもっていた，という仮説である。

5.7 シモタヤという従来の解釈と中土間形式

中土間形式をもつ戦国期の京マチヤが最小単位のマーケットであって，従来，シモタヤであると解釈されてきた，路に対してミセをだしていないマチヤも中土間を介して商いをいとなんでいた可能性がある。この解釈がただしければ，戦国期の京マチヤは，住み家よりもミセという側面を多分にもつことになる。したがって，つねにすむための住み家すなわち常住のための家として，個々の房が，火をあつかうカマドや水をあつかうナガシや寝間や便所などの生活に不可欠な要素をいまだそなえるにいたっておらず，そのためにウラにそなえられた要素（便所，井戸，土蔵など）を共有することによって，生活に不可欠な諸々の要素が確保されていた，とかんがえることができる。路に面してたつマチヤはウラを共有することで，個々の房のなかにはない，必要な要素をウラでおぎなっていた可能性がたかい。

6. 京マチヤにみられる移動性と仮設性の背景

京マチヤは，移動性と仮設性とを保持している。

マチヤが土地に定着している姿を保証するのは，第一に平面における掘立柱構造であり，第二に妻面における土台構造である。さかのぼれば，すべてが掘立柱構造であっても，それが土地に定着する姿をただちにしめすわけではない。

無数の柱穴が考古学的発掘資料として提示されている点に注目しなければならない。無数の柱穴は一定範囲内の場所ですこしずつ位置をかえながら，くりかえしたてられた小規模建造物群を示唆するであろう。無数の柱穴は建物の仮設性をしめす。他方，土台をもちいた構造は移動を前提とした建物にふさわしい。

戦国期京都のマチヤのなかで，初期洛中洛外図屏風に散見される，妻面が土台構造，平面が掘立柱構造という形態は，掘立による仮設性と移動性をかねそなえたものである。

では，なぜ，住居と了解されるマチヤが仮設性と移動性をかねそなえる必要があったのか。その必要性は，ミセをもつという側面にあったと想定することができる。しかしながら，ミセの姿には，路に面してタナをだす姿ばかりではなく，中土間の両側にミセをもつ姿をも想定することができる。後者の場合，先述のように，二つの鳥居にはさまれた中土間そのものが市立ての場をしめし，中土間の両脇の床上がミセであった可能性がある。と同時に，表の鳥居と裏の鳥居にはさまれた中土間をもつ姿のマチヤは，市の最小単位であった可能性がある。

この判断がただしければ，戦国期の市は，平安京にみられた，東市や西市といった領域が限定された土地のなかで展開した市ではけっしてなく，領域が限定されることなく，土地の上にたつことができるちいさい建物が都市域のひろい範囲にわたって散在したものであった。比喩的にいえば，かこまれた領域のなかでの経済活動ではなく，ごく小規模な箱が経済活動をなしえる場として，ちりばめられていた。さらに比喩的にいえば，戦国期京都のマーケットは，ケシ粒のようにちいさいマーケットが蜘蛛の子をちらすかのように，領域が限定されることなく，ひろがったものであった。そのひろがりをささえたのが，当該期のマチヤがもっていた建築形態であった。その姿は，仮設性と移動性をもち，Π字型をなす二つの鳥居にかこまれた場を形態的にしめす外観と内観をもっていたのである。

のちに，豊臣期に洛中地子免除にて旧来の領主的土地所有が洛中にて解体され，家主が家持として公認された後，マチヤは私的処分権のおよぶ対象になっていった。それに先行してマチヤの背後には，「家の分」と表記された，私的処分権のおよぶ土地をふくみもつようになっていた[注33)]。マチヤのウラ地における共同体的利用が解体して，私的に細分化されはじめるのは，天正年間である[注34)]。このとき，京都という都市における市場の形成は，あらかじめ限定されて設定された領域をこえてひろがっていった結果としての市場が都市全域を覆い尽くしたのではなく，市場の最小単位そのものを形づくる，ごく小規模な建物であるマチヤが最小単位の市として，ちらかるようにあまねく土地の上にひろがった結果としての市場である，といえる。

7. コラージュの結果としての建築形態とその合理性

木に竹をつぐのは無理のない建築的ないとなみである。

戦国期の京マチヤが掘立と土台を併せ持つのは，掘立柱構造と土台構造とのコラージュであった。これは合理的な建築的いとなみであった。同様に，戦国期の京マチヤが妻壁ないし界壁に土塀をとりこんだのも，妻壁ないし界壁と土塀と棟持柱構造のコラージュであった。これも合理的な建築的いとなみであった。また，妻壁ないし界壁と土塀と棟持柱構造のコラージュの結果，棟持柱を意味したウダツがマチヤの妻壁をも意味するようになり，近世的京マチヤが成立した点も確認した。

必要に応じて寄せ集めるのが手法としてのコラージュ

としたら，作品としてのコラージュは近世的京マチヤのように複数の部材や意味の寄せ集めによって新しくできた建築をさすだろう。

ここでくりかえし指摘したいのは，建築コラージュにうながされた一連の変容が多種多様な姿をうみだす過程であるとはかぎらない点である。本研究があつかってきた京マチヤの場合，近世初頭には属性①から属性⑧までをもつにいたって，近世的京マチヤとしてその姿をはっきりさせたものの，その過程はまさに均一な姿をうみだす過程であった。建築コラージュという一連の変容の終わりとして，変容の停止があり，多様な形態から成る都市域ではなく，均一な形態から成る都市域ができあがる。近世京都は，無数の近世的京マチヤから成る，よくいえば統一感のある都市であり，わるくいえば均一化された都市であった。

8. 建物条件付き都市という伝播

では，最後に，伝播について，考察する。

形態の変容がとまれば，形態はみずからを模倣する形態のクーロン化がはじまるだろう。建築形態の変容はコラージュによるとの立場にたてば，建築形態の変容の停止は，建築コラージュの停止をさす。

大場修が指摘する「京都型町家」が京都から伝播したとすれば，それは，京マチヤが近世初頭にいたって，属性①から属性⑧までも内包をひろげた結果，建築形態の変容が停止した後の出来事であった。その伝播された建物は，形態のクーロン化によって再生産されたもので，大枠はおなじ姿の建物の繰り返しであった，といえる。

内包をひろくとれば，外延がせまくなり，それに対応して具体的な例がへるので，形態に即していえば，外延をせまくした定義に規定された形態は，にたような姿になるだろう。属性①から属性⑧までを得た近世的京マチヤは，ほぼ瓜二つの建築形態をなし，それが数の上で支配的になって，都市域を覆い尽くすことになる。

では，「京都型町家」と了解される建物が，なぜ，上越市高田城下町のマチヤや安芸国宮島のマチヤとして遺存するにいたったのであろうか。と同時に，「京都型町家」ではないと了解されるマチヤが地方都市にあるのか。さらに，京マチヤはナカノマが吹き抜けでないが，高田城下町や宮島のマチヤはナカノマが吹き抜けであるように，なぜ，京マチヤは地方の「京都型町家」と差異をもっているのか。

まず，考慮すべきは柳田國男が提唱した周圏分布ないし方言周圏論である。藤田盟児は，周圏に即しつつ，「吹き抜けがある町家の歴史的展開に関する仮説」として，「吹き抜け型町家の分布図」をふまえつつ，その「分布からみると，柳田国男が提唱した「文化周圏」に該当するようである」とし，「オウエという部屋の機能，形態，名称に注目すると，宮島の町家は中世末期の町家の残像である可能性が高い」とした[注35)]。

柳田が提唱した周圏の後に，宮本常一が提唱した世間師も，伝播の一翼をになっていた。様々な地域をあるきまわって地元の村にもどってその知見をつたえた者として了解される世間師が「村を新しくしていくためのささやかな方向づけをしたことはみのがせない」[注)36]。

ナカノマが吹き抜けか否かといった差異が「京都型町家」と京マチヤにみられる場合がある。しかし，建築形態の差異ではなく，大枠に注目すると「京都型町家」という定義に合致するよくにた建築形態が都市域を覆い尽くす過程は，周圏に即しても世間師に即しても，説明に無理が生じる。

「京都型町家」と了解されるよくにた建築形態が都市域を覆い尽くす過程を，唯一，説明することができる概念は，おそらく，建物条件付き都市しかない。建物条件付き都市とは，都市形成の初期の段階で，一定の範囲をもってひろがる都市域に特定の建築のみしか立地し得ないようにあらかじめ条件付けられた都市である。このことが可能な都市はニュータウンしかない。

城下町はニュータウンであった。都市と農村を分離し，それに身分制を対応させ，都市では，武士と町人を領域区分した。このことは，都市が徐々に形づくられた結果ではけっしてなく，都市形成の初期の段階で条件付けられた都市計画であった。すなわち，条件づけられた建物（たとえば「京都型町家」）が中央から地方へ伝播したというよりも，その建築形態が都市形成の初期段階で，ある特定の都市域に植え付けられたのである。

そのことは，中央からでた要素が地方へ伝播して周圏をかたちづくるという周圏分布とことなる。また，実際，京都型マチヤがもっとも典型的に遺存している地域は，京都という都市そのものである。京都型マチヤが京都以外の地方でみられるのは，定型化された京都型近世的マチヤが都市の形成されていく過程のはやい段階に特定の都市域に植え付けられていたからにほかならないであろう。

局限してひろがる一定の都市域をあらかじめ設定し，そのなかに，これから立地していく建物に対して，あらかじめ形態上の条件をあたえておくことは，当該期の当該地の権力構造や所有形態によるだろうが，不可能ではない。その条件は，都市形成が初期の段階であればあるほど，建物に対して，あたえやすいだろう。そして，建物にあたえられたその条件が，大場のいう「京都型町家」という，路に面してたち，通り土間にそって三室が一列にならぶ通し柱型の建物の形であっても，不思議はなかろう。

このとき，「京都型町家」は，建物条件の具体例として京都以外でつかわれたと想定することができる。その

機能は，商いと常住にあり，それが適用された場は，城下町といった，近世初頭に新しくつくられたマチであった。

実際，新しい土地に新しい建築がたったのがニュータウンとしての城下町である。しかし，近世松本城下町[注37)]のように，近世初頭の都市形成に建物先行型が看取されるとしても，「京都型町家」がみられない場合がある。これは，「京都型町家」が建物条件の具体例として松本城下町につかわれはじめる前に都市形成が松本ではじまっていたからであろう。

一定の領域に建物条件が付されたと想定される近世城下町とは対照的に，近世的京マチヤが生成される母体となった京都は，ニュータウンではなく，古代と中世をへてきた都市である。京都における連綿とした建築的いとなみあるいは都市的いとなみの結果，本研究の立場によれば，おもに建築コラージュといういとなみを通じて，近世初頭に近世的京マチヤが生成された。この姿は，属性①から属性⑧までをもつ定型化された建築形態をなし，他都市へ建物条件として移植された際には，自らの姿を再生産するクーロン化を通じて，商いと常住の双方を機能としてになう容器を提供した。

しかし，なお，疑問視しなければならないのは，近世的京マチヤの母体は中世京都とりわけ戦国期京都であったと判断してよいものの，「京都型町家」の母体は京都であったのであろうか。かつて，藤島亥治郎は，「住家構成の発生史的汎性」[注38)]と題して，条件があれば，どこででも同じ類型をもつ建築形態が生成され得るモデルを提示した。では，本当に「京都型町家」は京都という都市を単一の起源とするのだろうか。それとも建物条件としてニュータウンに植え付けられた「京都型町家」は，その起源が京都ではなく，また別の起源，あるいは複数の起源がかんがえられるのだろうか。

応仁の大乱以降の京都は，築地を解体したように古代的側面をうすめていったが，その後の近世社会は，那覇，対馬，松前，長崎出島などのかぎられた窓口を外にひらくだけの鎖国社会を形成した。鎖国下の新しい社会の新しい都市が城下町であった。城下町の経済基盤は，貿易利潤ではなく，土地生産であった。

いま問題にしているマチヤは色濃く商いにかかわるとともにマーケットにかかわる。商いないしマーケットにふかくねざす経済基盤は，土地生産よりむしろ貿易利潤であろう。その意味で，ほとんど外に対してとざしていた近世社会をむかえる前段の社会がもっていた，商いないしマーケットにねざす，たとえば貿易利潤に即した経済システムを念頭におく必要がある。

同時に，大航海時代以降，東アジアやヨーロッパをふくめた領域での建築コラージュを想定する必要がある。というのも，建築コラージュは，異質なものが物理的にはなれていても文化的にはなれていても，互いにであえば，互いに寄せ集められ，ある形をなすにいたるからである。

9. おわりに—京マチヤに関する二つの仮説—

京マチヤに関する一連の考察を以下の仮説に整理して論をむすぶ。

すなわち，京マチヤは市立ての最小単位であり，その地方への伝播は都市形成の最初期に特定の都市域に対する建物条件として京マチヤが採用されたことによる。

<注>

1) 土本：中近世都市形態史論（参考文献９．以下，参９）．
2) 土本：中世後期から近世に至る掘立棟持柱構造からの展開過程に関する形態史的研究（参11）．
3) ロウ他：コラージュ・シティ（参４）．
4) 土本：京マチヤの原形ならびに形態生成（参13）．
5) 三村卓也，善田健二，土本俊和：上越市高田地区にみる棟持柱と歴史的町屋建築－今井染物店を事例として－，日本建築学会北陸支部研究報告集，49，379-382頁，2006.
6) F ソシュール著，小林英夫訳：一般言語学講義，岩波書店，1940
7) 伊藤：中世住居史［第二版］（参１）．
8) 土本「京マチヤの原形ならびに形態生成」（参 13）にて論じた．この論文で批判した堀内らあるいは内田らの報告がほころびをみせたそもそもの背景は，累積的な過程にはいった段階での考察を停滞的な過程と区別しなかったことにあろう．すなわち，先史や古代をあつかった考古学的発掘を中世後期から近世にいたる時代に無批判に応用した場合に生じたほころびであった．すなわち，クロード・レヴィ・ストロースが『人種と歴史』（みすず書店，1970）で言及した停滞的社会と累積的社会との差異を考古学的発掘もふまえる必要がある．先史や古代は概して停滞的社会である．その社会がのこした土地を，地質学の手法を応用して，地層累重の法則をあてはめ，層序として時代を判定した場合，柱穴がなければ，問題はすくなかろう．問題が生じるだろうと想定されるのは，社会的変動がはげしく，それにともなって，土地の上の建物の姿の変動もはげしく，その結果，比較的うすい地層のなかに短時間でのはげしい変化が埋蔵されている場合である．この場合，すこぶるうすい地層の差異をとらえないかぎり，みじかい時間でのはげしい変化を時系列でとらえることができず，みじかい時間でのはげしい変化を，一つの共時態としてとらえる危険性がある．堀内らあるいは内田らの報告はまさにこのあやまりをおかしたものである．応仁の大乱以降の京都は累積的社会であり，みじかい期間内ではげしい変化があり，それが時系列で展開した．この変容過程を考古学的発掘で把握するには，おのおのの単層を抽出していく必要があろう．
9) 土本「京マチヤの原形ならびに形態生成」（参 13）にて八つの属性をしめした．なお，内包，外延，属性に関しては，粟田賢三 古在由重『岩波哲学小辞典』（岩波書店，1979）参照．
10) 大場：近世近代町家建築史論（参 10）．
11) 伊藤：中世住居史［第二版］（参１）
12) 野口：中世京都の町屋（参６）．西山良平：都市平安京，京都大学学術出版会，2004 参照．
13) 新川竜悠，土本俊和，早見洋平：築地と土塀—土を用いた牆壁の諸形態に関する基礎的研究—，日本建築学

会計画系論文集，604，175-182 頁，2006.
14) 高橋康夫他編：図集 日本都市史，東京大学出版会，1993，108 頁参照．土本：中近世都市形態史論（参9）総論4参照．
15) 土本：京マチヤの原形ならびに形態生成（参 13）234 頁引用．
16) 土本：京マチヤの原形ならびに形態生成（参13）．
17) 五味文彦：京に中世を探る，五味文彦編：都市の中世，吉川弘文館，1992，23 頁引用．
18) 土本：中近世都市形態史論（参9）「総論4ウダツ」45-59 頁参照．
19) 柳田國男，山口貞夫編：居住習俗語彙，国書刊行会，1975，6 頁引用．このほか，森脇太一編：邑智郡誌，森脇太一，1937．および，土本：中近世都市形態史論（参9）「総論4ウダツ」45-59 頁参照．
20) 伊藤：中世住居史［第二版］（参1）「類型の成立と零細土地所持」175-179 頁参照．
21) 山本雅和：中世京都の街路と町屋，高橋康夫編：中世のなかの「京都」―中世都市史研究 12―，新人物往来社，2006．なお，この指摘は，土本「京マチヤの原形ならびに形態生成」（参13）でもふれた．
22) 伊藤：中世住居史［第二版］（参1）．土本：京マチヤの原形ならびに形態生成（参13）．
23) 伊藤：中世住居史［第二版］（参1）191 頁引用．
24) 伊藤：中世住居史［第二版］（参1）「平面形式」186-191 頁参照．
25) 桜井みどり，南孝雄：伏見城跡，京都市埋蔵文化財研究所編：平成 11 年度 京都埋蔵文化財調査概要，京都市埋蔵文化財研究所，2002．
26) 伊藤：中世住居史［第二版］（参1）87 頁引用．
27) 伊藤：中世住居史［第二版］（参1）83 頁引用．
28) 伊藤：中世住居史［第二版］（参1）87 頁引用．
29) 森内昭光，黒野弘靖：高岡市金屋町における世帯数の増減にともなう住戸の空間的変容過程に関する研究，日本建築学会北陸支部研究報告集，45，303-306，2002．
30) 高橋康夫：京都の町と住まいの歴史，京都新聞社編：京の町家考，14-39 頁，1995．「しもたや」に関する指摘（30 頁）など．
31) 久野俊彦：商人の絵巻にみる民俗，国立歴史民俗博物館編：中世商人の世界―市をめぐる伝説と実像，日本エディタースクール出版，44-62 頁，1998．
32) 伊藤正義：市庭の空間，国立歴史民俗博物館編：中世商人の世界―市をめぐる伝説と実像，日本エディタースクール出版，109-139 頁，1998．連釈之大事「修験山伏の市立図」は，同書の 126 頁および 241-243 頁参照．
33) 早見洋平，土本俊和：天正期京都における高密化の過程―「大中院文書」による微視的景観の復原―，都市計画論文集，40-2，14-24 頁，2005．
34) 土本：中近世都市形態史論（参9）「各論7 天正二――六年・京都下京・古町」262-303 頁参照．
35) 藤田盟児：安芸国の港町―宮島と呉の町家―，日本民俗建築学会シンポジウム 瀬戸内の小島に残る港町の保存の意義と活性のあり方，平成 19 年度文部科学省科学研究費補助基金研究成果公開促進費補助事業，8-9 頁，2007.10.6.
36) 宮本常一：忘れられた日本人，岩波書店，1984．
37) 畑林真之，土本俊和：近世松本城下町における都市の原景―水系と町割からみた都市域の形成過程―，日本建築学会計画系論文集，483，221-230 頁，1996．
38) 藤島亥治郎：住家構成の発生史的汎性，竹内芳太郎編：今和次郎先生古稀記念文集，相模書房，1959．

＜参考文献＞

1) 伊藤鄭爾：中世住居史［第二版］，東京大学出版会，1984（1958 初版）．理論と実証の双方を提示する民家研究の古典であり，京マチヤ研究の原点に位置する．
2) Richard Weiss: Häuser und Landschaften der Schweiz, Eugen Rentsch Verlag,1959．原形と変容と伝播をあつかった民家研究であり，本論が進むべき方向性をしめす．
3) Aldo Rossi: L'architettura della Città, CittàStudiEdizioni, 1965. Aldo Rossi: The Architecture of the City, The MIT Press, 1982. アルド ロッシ著，大島哲蔵 福田晴虔訳：都市の建築，大龍堂書店，1991．建築形態の変容を都市のなかで捕捉した理論的な大著であり，本論の理論的な源泉の一つである．
4) Colin Rowe, Fred Koetter: Collage City, The MIT Press, 1978. C.ロウ，F.コッター著，渡辺真理訳：コラージュ・シティ，鹿島出版会，1992．コラージュで描かれた理想都市コラージュ・シティが都市と建築にコラージュ概念をあたえる．
5) 高橋康夫：京都中世都市史研究，思文閣出版，1983 建築史家による本格的な京都研究の大著であるが，建物先行型の概念をもたない．
6) 野口徹：中世京都の町屋，東京大学出版会，1988，1982 初出．建物先行型論に関連する先駆的な大著であるが，小規模建造物を対象にふくまない．
7) 谷直樹，増井正哉編：まち祇園祭すまい 都市祭礼の現代，思文閣出版，1994．京マチヤを含む祭縁空間の総合的研究であり，できた建築にともなう建築のいとなみをしめす．
8) Jukka Jokileht: A History of Architectural Coversation, Elseviewer, 1999. ユッカ ヨキレット，益田兼房監修，秋枝ユミ イザベル訳：建築遺産の保存 その歴史と現在，2005，アルヒーフ．純真性の概念にもとづいた，建築の歴史と建築遺産に関する大著であるが，コラージュ概念をもたない．
9) 土本俊和：中近世都市形態史論，中央公論美術出版，2003．中世後期から近世に至る京都の形態史的研究の集大成であるが，京マチヤへの考察が十分ではない．
10) 大場修：近世近代町家建築史論，中央公論美術出版，2004．京マチヤを核とする体系的な学術図書であり，京マチヤの伝播を「京都型町家」として指摘する．
11) 土本俊和編：中世後期から近世に至る掘立棟持柱構造からの展開過程に関する形態史的研究，2001 年度―2003 年度科学研究費補助金（基盤 C(2)）研究成果報告書，2005．棟持柱祖形論に即した研究の集大成で，京マチヤの形態生成をあつかう本論の前提に位置する．
12) Toshikazu Tsuchimoto: Unfixed Capital Kyoto, International Conference on East Asian Architectural Culture, Kyoto 2006, Proceedings II, pp.464-474, 2006．京都の町並みと京マチヤの非不動産性を指摘した上で，都市全域にマーケットが成立する過程と京マチヤがもつ建築形態の関連を指摘した．
13) 土本俊和：京マチヤの原形ならびに形態生成，西山良平 藤田勝也編：平安京の住まい，京都大学学術出版会，195-241 頁，2007．考古学的発掘資料に即して京マチヤの原形と形態生成を論じているが，京マチヤの伝播に関する考察をふくまない．
14) 土本俊和：民家のなかの棟持柱，民俗建築，131，102-112 頁，2007．棟持柱の建築的意義をあつかった，棟持柱祖形論の核をなす考察である．
15) 民家小委員会編：東アジアから日本の都市住宅（町家）を捉える，日本建築学会，2007．東アジアからマチヤをとらえたパネルディスカッション資料である。

＜研究協力者＞

新川 竜悠　信州大学大学院研究生
三村 卓也　信州大学大学院博士前期課程
善田 健二　信州大学大学院博士前期課程